

緋の普及と産<sup>産</sup>取との関係 —沖縄県具志川市の場合—  
 具志川市役所 市史 (囑託) 嘉陽妙子

目的 沖縄県具志川市において、昭和の戦前まで、どのような染織があったか。その素材を知ると同時に柄についても調べ、特に緋柄の普及について、屋取との関係を考察する。

方法 具志川市内の27字のうち、新興住宅地の1字を除いた26字について、古村落と屋取集落に分けて、明治生れ44人、大正生れ6人の方々から聞き取り調査を行った。

結果 素材として、芭蕉、木綿、絹があった。染料は、芭蕉にはシャリンバイとサキシマスオウノキが主に用いられ、木綿、絹には藍や化学染料が使われていた。藍は自分で染める人もいたが、ほとんど染屋にたのんでいた。大正から昭和にかけて4軒の染屋があったが、それは全部屋取の人々が管んでいた。それ以外にも機織を専門にしながら、緋を括って染めている所があったが、それもやはり屋取の人々であった。古村落の人々は、絹柄だけを織り、緋は織らなかつた。しかし、大正になって屋取の人から緯緋を習い、昭和に入って絵図式の緋の技法を洋裁学校で学び、経緯緋を織る所もあった。屋取の人々は、絹や緋を織っていた。それは、手結いによる緯緋が主であったが、染屋を通して絵図式の緋の導入などもあり、経緯緋も織られていた。

これらの事から、具志川市では古村落と屋取の間に、百姓と士族の差が見られ、古村落では緋の普及が遅かった事が分る。反面、屋取では、士族の流れをくむため、集落発生と同時に緋が織られていたと考えられる。屋取での緋括りの技術が、古村落の人々に与えた影響は大きく、特に、染屋の存在が緋の普及に役立ったと考えられる。